

房総半島における日本武尊伝説



この資料はふるれんネットのいちまる館よりダウンロードできます

上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会会員)

ヤマトタケル尊とは

日本武尊の伝説は日本全国に残されているが、私達の住む千葉県にも多くの伝説が残されている。第12代景行天皇の皇子(みこ)として生まれた皇族で、日本書紀では「日本武尊(やまとたけるのみこと)」、古事記では「倭建命(やまとたけるのみこと)」と表記されている。現在の漢字表記では一般に「日本武尊」が通用される。

第14代仲哀天皇の父に当たり、熊襲征討や東国征討を行ったとされる日本古代史上の伝説的英雄です。

日本武尊は景行天皇12年(西暦82年)に父親は景行天皇、母親は播磨稲日大郎姫の二男として生まれ、景行41年(西暦111年)に29歳で逝去しています。日本書紀では、双子として誕生した際に、天皇が怪しんで臼(うす)に向かって叫んだことから大碓尊と小碓命の名が付けられたという。尊の用字は皇位継承者を指す人物に使用されるものとされている。幼名を小碓尊(おうすのみこと)、青年期を日本童男(やまとおぐな)、成人期には日本武尊(やまとたけるのみこと)。

日本武尊の配偶者には6名が記されている。

妃 両道入姫皇女(ふたいじりわけびめのひめみこ) —垂仁天皇皇女で14代仲哀天皇の母親

妃 吉備穴戸武媛(きびのあなのたけひめ) —吉備武彦の娘

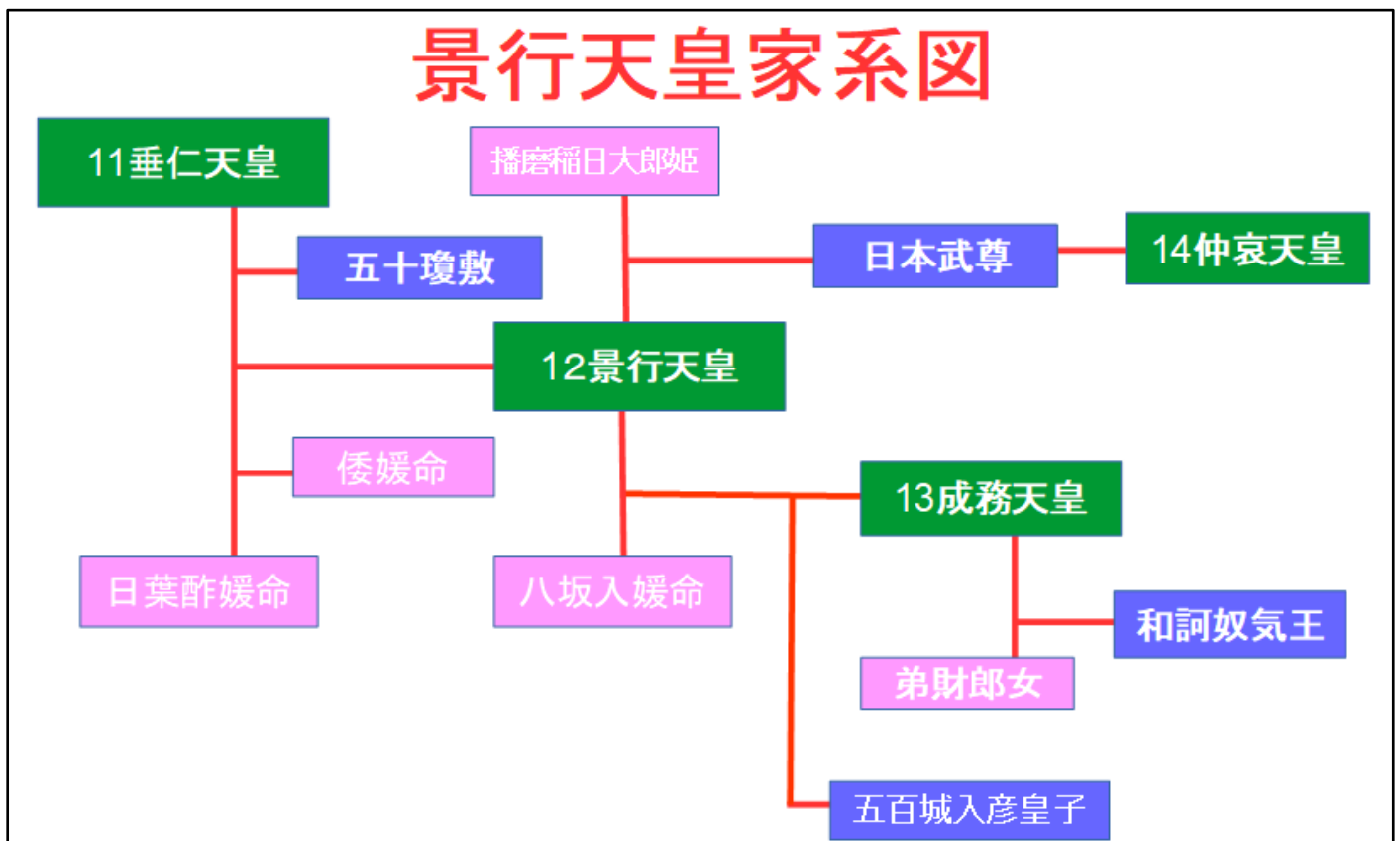
妃 弟橘媛(おとたちばなひめ) —穂積氏の忍山宿禰の娘(9男を生む)

妃 山代之玖々麻毛理比売(やましろのくくまもりひめ) —日本書紀に記載なし

妃 布多遅比売(ふたじひめ) —日本書紀に記載なし

妻 (日本書紀では名は不詳、旧事本記では橘姫)

※ 「古事記」では、倭建命のひ孫の迦具漏比売命が景行天皇の妃となって大江王(彦人大兄)をもうけるとするなど矛盾があり、このことから景行天皇とヤマトタケルの親子関係に否定的な説がある。また、各地に征討に出る雄略天皇などに似た事績があることから、4世紀から7世紀ごろの数人のヤマトの英雄を統合した架空の人物という説もある。



ヤマトタケル尊の西征と東征

ヤマトタケル尊は、4世紀頃に景行天皇の命を受けて西征（南九州の熊曾建（くまそたける）や出雲の出雲建（いずもたける）と東征に向かっている。ここでは東征について語ります。

この征伐については、古事記（和銅5年・712年）と日本書紀（養老4年・720年）では表現や内容が違うので、両方を表示して記載します。

{古事記}では、西方の蛮族の討伐から帰るとすぐに、景行天皇は倭建命に比比羅木之八尋矛（ひいらぎのはちすほこ）を授け、吉備臣（きびのおみ）の祖先である御鋤友耳建日子（みすきともみみたけひこ）をお供とし、重ねて東方の蛮族の討伐を命じる。倭建命は再び倭比売命（やまとひめのみこと）を訪ね、「父天皇は自分に死ねと思っているのか」と嘆く。倭比売命は倭建命に伊勢神宮にあった神剣「草那藝劍（くさなぎのつるぎ）」と袋を与え、「危急の時にはこれを開けなさい」と言う。

日本書紀では、当初、東征の将軍に選ばれた大碓命（おおすのみこと）は怖気づいて逃げてしまい、代わりに日本武尊が立候補する。

天皇は斧と鉞（まさかり）を授け、「お前の人となりを見ると、身丈は高く、顔は整い、大力である。猛きことは雷電の如く、向かうところ敵なく攻めれば必ず勝つ。形は我が子だが本当は神人（かみ）である。この天下はお前の天下だ。この位（天皇）はお前の位だ。と話し、最大の賛辞と皇位継承の約束を与え、お供に吉備武彦（きびのたけひこ）と大伴武日連（おおとものたけひ）と、料理係に七掬脛（ななつかはぎ）を選ぶ。出発した日本武尊は伊勢で倭姫命（やまとひめのみこと）より草薙劍を賜る。

最も差異の大きい部分である。「日本書紀」では兄大碓命は存命で、意気地のない兄に変わって日本武尊が自発的に征討におもむく。天皇の期待を集めて出発する日本武尊像は栄光に満ち、「古事記」の涙にくれて旅立つ倭建命像とは、イメージが大きく異なる。

ヤマトタケル尊の東征軍路は古事記と日本書紀では相違があり、日本書紀の方が陸奥、日高見（北上川流域の国）へとより北の方に侵攻していったように書かれている。（コース図参照）

● 古事記での軍路

倭—伊勢—尾張—駿河—相模走水—上総—常陸新治—筑波—相模足柄—甲斐—科野（しなの）—尾張—近江伊吹山—伊勢能煩野（のぼの）で逝去した。

● 日本書紀での軍路

倭—伊勢—駿河—相模走水—上総—陸奥—日高見—常陸新治—筑波—甲斐—武蔵—上野—碓氷坂—信濃—美濃—尾張—近江伊吹山—伊勢能煩野で逝去した。



日本書紀(景行天皇)

冬十月二日、日本武尊は東征に出発し七日に寄り道をし伊勢神宮を拝まれた。そこで倭姫命にお別れの言葉を述べ、「今天皇の御命令を承って東国に行き、もともろの欺く者を討つことになりました。それでご挨拶に参りました」と言われた。

倭姫命は草薙剣をとって、日本武尊に授けられ「慎重になさいませ。決して油断なさってはいけません」と言われた。

この年、日本武尊は初めて駿河に到着された。その賊は偽り従い欺いて、「この野に大鹿が極めて多くおります。吐く息は朝霧のようで、足は茂った林のようです。御出かけになって狩りをなさいませ」と申し上げた。

日本武尊はその言葉を信じて野に入り狩りをしたが、賊は皇子を殺そうという気があってその野に火を放った。

皇子は欺かれたと気づき、火打石を取り出し火をつけて迎え火を作り逃げる事が出来た。皇子は「もう少しのところまで欺かれる所であった」と言われた。そして、ことごとくその賊どもを焼き滅してしまわれた。そこで名付けられたのが「焼津」という。

更に相模に着き、上総に渡ろうとされ海を望まれて大言壮語して「こんな小さな海、飛び上がっても渡ることができよう」と言われた。ところが、海の中ほどまで来た時、突然暴風が起こって御船は漂流して渡ることができなかった。その時皇子

につき従っておられた妾(おみな)の弟橘媛(おとたちばなひめ)が皇子に申されるのに「いま風起こり、波が荒れて御船は沈みそうです。これはきっと海神のしわざです。賤しい私めが皇子の身代わりに海に入りましょう」と申し上げた。そして、言い終わるとすぐに波を押し分け海にお入りになった。暴風はすぐに止んで、船は無事に岸に着けられた。時の人はその海を名付けて「馳水(はしりみず)浦賀水道」と言った。こうして、日本武尊は上総より転じて陸奥国(みちのくに)に入られた。その時、大きな鏡を船に掲げて海路をとって葦浦を廻り、玉浦を横切って蝦夷(えみし)の支配地に入られた。蝦夷の首領の島津神・国津神たちが、竹水門に集まって防ごうとしていた。しかし遙かに王船を見てその威勢に恐れて、心中勝てそうにないと思って、すべての弓矢を捨てて仰ぎ拝んで「君の

お顔を拝見すると、人より優れておられます。きっと神でありましょう。お名前を承りたいのですが」と申し上げた。皇子はお答えになって「われは現人神(あらひとがみ)天皇の皇子である。」と言われた。蝦夷らはすっかり畏まって着物をつまみ上げ、波をかき分けて王船を助けて岸に着けた。そして、自ら両手を後ろに縛って降伏した。そこで日本武尊は、その罪を許された。

こうして、その首領をとりことして手下にされた。蝦夷を平らげられ、日高見国から帰り、常陸を経て甲斐国に至り、酒折宮においてになった。その時、灯りをともしてお食事をされた。この夜、日本武尊は歌を作って従者にお尋ねになって、こう言われた。「新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる」

しかし、従者たちは答えられなかったが、御火焚の者が皇子の歌の跡を続けて歌って「日日並べて 夜には九夜日には十日」とお答えした。皇子は御火焚の賢いのをほめて、暑く褒美を与えられた。この宮においてになって、鞆部(ゆけいのもとのお)(兵士)を大伴連(おおともむらじ)の先祖の武日(たけひ)を賜った。

日本武尊は「蝦夷の悪い者たちは全て罪に服した。ただ信濃国、越国(北陸)だけがすこし王化に服していない」と言われた。甲斐から北方の、武蔵・上野をお廻りになって、西の碓日坂(碓氷峠)にお着きになった。

そのとき、日本武尊はしきりに弟橘媛を偲ぶお気持ちを持たれ、碓日嶺にのぼり、東南の方を望まれて三度歎いて「吾妻はや(わが妻は、ああ)」と言われた。そこで、碓日嶺より東の諸国を「吾孀国」と言うのである。



房総半島各地におけるヤマトタケル尊の伝説

ヤマトタケル尊が三浦半島から暴風雨の中房総半島の渡ったことは、記紀には詳しく書かれていませんが、日本書紀ではヤマトタケル尊はすぐに上総から陸奥国に入ったと書かれており、また、古事記では上総の国に渡ることができたとしているが、房総半島での出来事は全く書かれていない。しかし、古老の目碑や里人の伝承、神社の社記などにはヤマトタケル尊がこの地に長く滞在し、蝦夷らを征伐したことや、弟橘媛の為の陵を造った事などが多く伝えられています。これらは、千葉県内に残る歴史書にも紹介されています。また、千葉県内にはヤマトタケル尊や弟橘媛を祭神とする神社がかなり多く見られる。祭神はヤマトタケル尊でもその由緒がはっきりしない神社もありますが、由緒がはっきりわかっている神社も多く、これらの神社を紹介する。

房総半島とは

房総半島という呼び名は、昔の律令制に基づく地方行政区名だった安房（あわ）の「房」と上総と下総の「総」が合体したものです。この国名は飛鳥時代から明治時代初期まで使われていました。「総」は良い麻という意味があり、総国は良い麻がとれる地という事になる。また、安房という地名は四国の阿波国にいた「天太玉命（あめのふとたまのみこと）の孫にあたる天富命（あめのとみのみこと）が新開拓地として房総半島南部に上陸し、開拓を始めました。この忌部氏が住んだところを阿波→安房と呼んだという。当時は、都を出た役人が後の東海道を通して東に向かい、房総半島に至るのに北部の陸路で行くか、三浦半島から海路で渡るかの二通りの道を利用した。通常は海路の利用が多く、その為に房総半島の中部が都に近いので「上総」とし、その北を「下総」と定められた。「古事記」や「日本書紀」は飛鳥時代に天武天皇の命により編纂され始め、奈良時代に成立しているので、ヤマトタケル尊の時代には使われていない国名も書かれている。

房総半島上陸地の諸説

房総半島西岸には、ヤマトタケル尊が上陸したという伝説を伝える神社がありますが、その地が幾つもあるのを地図から想像して見ました。走水から船出したヤマトタケル尊は、弟橘媛の入水により突然の暴風から難を逃れる事が出来た。そして房総半島で最初に上陸した土地は、富津か木更津のどこかであったと思われる。伝承をもとにすると上陸地点の海岸は、八剣八幡神社近くで、三舟山近く、金谷神社、みさご島付近のどこかで、軍船の停泊地が館山湾内ではなかったかと思われる。

古代の房総半島は、海水面は7mほど高かったことから、現代の富津岬は海面下であり、ここは干潟と思われる。

ヤマトタケル尊の船の部材があると言われる金谷神社や、弟橘媛の陵と伝えられているみさご島付近は、古代と位置はほぼ変わらず、海が前に広がっています。八剣八幡神社と三舟山は現在は海岸から離れていますが、大和時代には海岸近くにあったと思われる。その為、八剣八幡神社付近に上陸したとも考えられる。



上陸候補地 | 木更津市 やつるぎはちまん 八剣八幡神社付近

創建年代は不詳ですが、鎌倉時代初期と言われ、源頼朝が社殿を寄進したという。神輿が関東三代神輿と言われ、1.5トンの重量があるという。祭神は日本武尊・誉田別命・息長足姫命・足仲彦命・素戔鳴命でヤマトタケル尊が東征の折、相模国三浦から船でこの地に渡ってきました。社伝によると、ヤマトタケル尊はしばらく滞在したと記されている。



鈴かな海を見ると入水した弟橘媛の事を思い出され、悲しみのあまりなかなかこの地を離れることができなくなっていた。その為この地を「君不去(きみさらず)」というようになり、木更津の地名の由来となったという。

ヤマトタケル尊の呼んだ歌「君去らず 袖しが浦に立つ波のその面影を見るぞ悲しき」

陸候補地2 君津市 三舟山付近

君津市にある三船山は元「御船山」と書かれていた。それが三船山から三舟山と書かれるようになった。三浦半島を帆し、ヤマトタケル尊が嵐の後着岸したのが、この山の南に位置する海岸付近だったという伝承がある。これは「吾妻神社記」によるものですが、君津郡誌にも取り上げられている。

古代の海岸線を推測した地図では、現在富津市にある岬はなく、三舟山付近に海岸線がありました。この辺りにヤマトタケル尊の船が着岸したと言われています。

上陸候補地 3 富津市 ^{かなや}金谷神社付近

「君津群誌」では、三浦半島と斜めに対し、房総半島に渡る最短コースを考えると、富津に着くことになるという説明している。富津という地名の由来については、「古津(古い港)」が変化したなどと諸説あり、その中に弟橘媛が入水した際に身につけていた布が海岸に流れ着いたという伝承から「布流津(ふるつ)」となり「富津」に変わったという説もある。海の流れが三浦半島と房総半島を最短で結ぶ現在の富津岬方向であったなら、ヤマトタケル尊の船もそこに着いたと考えられる。しかし、暴風も考慮しなければならず、簡単に決められないと思う。金谷神社は創建年代は不詳ですが、祭神は豊受姫神・金山彦神・日本武尊です。この神社に納められている「大鏡鉄」が有名で、直径が1.6m・厚さ11cm・重さ約1.5tある巨大な円盤形の金属器です。この大鏡鉄は文明元年(1469年)に金谷神社の沖合から引き揚げられたものと言われ、伝説では海龍王の釜の蓋とされていたが、江戸時代後期になると平田篤胤が「玉櫛」の中で「日本武尊が東国征討で浦賀沖から房総半島に渡った際に、船首に着けていた大きな鏡である」と推論をしているが、昭和42年に科学的に調査した結果、三浦半島で造られた製塩用の平釜と結論された。



上陸候補地4 勝山の海岸・みさご島・浮島

勝山のみさご島には、弟橘媛の亡骸が流れ着いたという伝説があり、村人たちはここに流れ着いた弟橘媛の亡骸を葬ったという。「みささぎ島」や「操島」とも呼ばれていたそうで、それが「陵・みささご」-「みさご」となった。

暴風の中、舵取りもできず風任せに海を渡ったと思われ、船の着岸地と亡骸の着岸地はほぼ同じではないかと思われる。後に、景行天皇も訪れていることから、よほど重要な場所であったと思われる。

弟橘媛の遺骸は、ここから三黒を経由して山間部を抜けて茂原市本納に運ばれたという。ヤマトタケル尊が海路で房総半島を南岸を周り東岸を北上して陸奥に向かったとすれば、本納の地は寄港地となり、弟橘媛の遺骸と対面してきたのではないかと思われる。遠方の浮島には、景行天皇が逗留し仮宮を置いたという伝承が残っている。



上陸候補地 5 館山湾

「安房郡誌」には、説としてヤマトタケル尊は走水より館山湾付近に着いき上総の国に上陸したという。上総とは、房総半島全体を指しているという意味で、房総半島の淡水(あわ)の渡り場を渡ったと説明している。この淡水の渡り場が

館山湾ではないかと考えられる。そして、後に陸奥に向かう時に通った葦浦は「吉浦」のことであり、陸路で館山から吉浦海岸に行ったとされている。ただ、葦浦は野島崎、玉浦は夷隅郡で、海路で南に回って着いたとも書かれているが、その他の説もあり定まっていない。

上陸候補地 6 千葉市 ^{やつるぎ}八劔神社付近

祭神は日本武尊・大日靈貴尊・大己貴尊で、ヤマトタケル尊が東征の折、相模国三浦からこの地に渡って来た。ヤマトタケル尊は当時起きていた争いを平定し、国を2つに分割して南を上総国、北を下総国とするように命じたという。

村人たちは「東国鎮護征夷神八劔神社」として祀りました。八劔神社には、天神社も合祀されている。



ヤマトタケル尊にゆかりのある場所と神社

房総半島には、ヤマトタケル尊が上陸し滞在した場所に神社や伝説が残っています。それらを紹介します。

^{たちばな}橘神社 木更津市太田

創建年は不明。祭神は弟橘媛命。

木更津市太田にある標高44mの太田山に鎮座しています。ヤマトタケル尊はこの山に登り、海を見下ろして弟橘媛を偲んだと伝えられている。この神社は縁結びの神で、周辺は「恋の森」と呼ばれています。「君去らず・・・」の歌はここでよんだと言われている。



^{とうはち}刀八神社 木更津市太田

創建年不詳。祭神は大山祇命・日本武尊の二神を祀る。

社伝は境内石碑によると、景行天皇の四十年庚戌、日本武尊の東征の時、相模国より本州に渡り給はんとす。海上遽に波荒れ御船將に危からんとす。弟橘媛命申し給はく「これ尊の相模の地より此の海を臨ひて、これ小海なり 立跳ねりにも渡りべし」とあさみ給ひしに依りて渡津見神の怒り給ふなり、とて、身を躍らして海に投じ給ひ尊の御命に代わり給ふ。暴風忽(たちまち)に治まり恙なく御船此地に着き給ふ。尊 姫の死を悼みて太田山頂に登り、海を眺めて暫く去り給はず、依りて、太田山頂を「恋の森」と呼ぶに至れり、里人、此の祠に日本武尊を併せ祀る。



^{あずま}吾妻神社 木更津市吾妻

創建年は不詳。祭神は弟橘媛命

創建年は不詳ですが、伝承によるとヤマトタケル尊の東征で、走水を渡る際に暴風に遭い、弟橘媛が入水し波が治まり無事に着岸した。漂着して数日後、一枚の布が打ち上げられ、その布が弟橘媛の着物の袖であったので、ヤマトタケル尊はそれを大切に納めて祠を建てた。古事記では、櫛が漂着となっている。

この伝承が確かなら西暦110年の創建となる。

日本武尊の歌「君さらず 袖しが浦に立つ波のその面影をみるぞ悲しき」

神社の近くには「鏡が池」があり、弟橘姫の鏡を沈めたところと言われている。



あずま
吾妻神社 袖ヶ浦市三黒

創建年は不詳。祭神は弟橘姫命。

黒戸（畔戸）の海岸に弟橘媛の亡骸が流れ着きました。御陵を造るために本納に道路を運んでいると、この地で御車が止まってしまった為、櫛を本納に送り、亡骸をここに葬ることにしました。そして、この地を御骸（みくろ）村と名付けました。これが三畔（みくろ）となり、やがて三黒と変わったという。（三黒）は（骸むくろ）が転じたもの。ヤマトタケル尊がここに立ち寄ったかは不明です。弟橘媛の亡骸が埋葬されているとすれば、ここは陵となります。円形の小さな古墳の境内にあり、臂松（ひまつ）古墳と呼ばれている。里伝によると、陵には松が植樹されたと言い、ここに亡骸が埋められているとしたら、弟橘媛を祀る他の神社の規模に比較しても疑問が生じるので、本納の橘樹神社に葬られているのが正しいのではないか。



しまあな
島穴神社 市原市島野

創建年は、景行天皇40年（西暦110年）、祭神は志那戸比古命で相殿として日本武尊・倭比売命。

ヤマトタケル尊が東征の際、海神の怒りを鎮めるために身を捧げた弟橘媛が「無事に東国に着いた際は、風鎮めの神を奉ります」と、大和の風鎮めの神に祈っていたので、尊が風神の「志那都比古命」を祀った。後に景行天皇が御東行の際、日本武尊と倭比売命を合祀した。



あねさき
姉崎神社 市原市姉崎

創建年は景行40年（西暦110年）、祭神は志那斗弁命で相殿に日本武尊・天兒屋根命・塞三柱神・大雀命。

ヤマトタケル尊が東征の際、速水の海で嵐に遭い、お妃の弟橘媛の犠牲により無事に上総の地に着かれた。そしてこの宮山台において妃を偲び、かつ航行安全を祈願し、風神の志那斗弁命を祀ったのが創始と伝えられている。また、景行天皇が東巡の際に日本武尊を合祀したと伝えられている。



房総半島は激戦地

日本書紀や古事記に書かれている蝦夷との最大の戦いは房総半島での戦いと言われている。鹿野山一帯を支配していた阿久留王（あくろおう）は大和の支配を拒否するために全軍挙げて戦いに挑みました。それは大変な激戦であったといわれ、兵士らの血は川を赤く染めていたと言われている。

ヤマトタケル尊が東征に派遣されたのは、房総半島の袖ヶ浦に宮を置いて治めていた景行天皇の皇子が、阿久留王に攻められて滅んだことから、それを取り返すことにあったという。それが主目的とすれば、「古事記」に書かれているよう

に、房総半島での戦いこそが東征の目的であり、この戦いに勝利した後山間部を経由して尾張のあつたに向かったと思われるが、「日本書紀」では陸奥の日高見国まで遠征して行ったことになっています。酒折宮の歌から、日高見国は新治・筑波より北にある地域と推測され、房総半島での激しい戦いの後、ヤマトタケル尊は更に北に向かった。

房総半島の西海岸沿いに日本武尊を祭神とする多くの神社が存在し、伝承があることから、阿久留との戦いを前にして海岸のどこかに拠点をおいて各地に出かけ、抵抗する賊らに圧力をかけて行ったと思われる。



しらはた
白幡神社 市原市君塚

創建年は不詳。祭神は大日武神（現在は日本武尊）・右大将頼朝。
ヤマトタケル尊が東征の際、休憩した際に塚に杖を立てて置いたことから「武（たける）の塚神」と称し、この部落を武（たける）の郷と称した。その後、源頼朝が尊の史跡と聞き、「武の塚大権現」に白旗を奉納して戦勝祈願し、随従武士の納めた矢などがあったが、文政9年（1826年）の火災で焼失したという。



しらはた
白幡神社 市原市村上

創建年は不詳。祭神 日本武尊・源頼朝で諏訪神社の末社。
伝承によると、源頼朝が村上で一夜を明かした記念に松を植え、白旗の松と名付けたという。後に、世話人が頼朝を追慕して松の木のそばに白幡神社を建立したという。



おしぬま
押沼神社 市原市押沼

創建年は不詳。祭神は日本武尊。
現在は「押沼」と言われているが、昔は「鷺沼」と呼ばれていた。かつてここは沼のある湿地帯が広がっていた。付近に製鉄遺跡があり、日本武尊と大和政権が支配していた鉄産地で、何らかの関係がある様です。



わし
鷺神社 市原市今津朝山

創建年は垂仁天皇88年（西暦59年）と言われる。
祭神は天日鷲命・日本武尊。
氏子は鶏と鶏卵を食べることを忌んだ。この理由は未詳ですが、ヤマトタケル尊が死んだ後に白鳥になったことにちなむものです。



こたか
小鷹神社 市原市不入斗

創建年は寿永3年（1182年）に鎮座と言われる。祭神は日本武尊。
延宝7年（1679年）に再建された。
伝承では、ヤマトタケル尊が東征の際、軍を数日留められて、その間大高谷やその他の住民が食料を奉った由緒により、氏子は10月15日の祭礼で苞飯を神前に供える習慣がある。景行天皇が東征の際に当地立ちに寄られている。



いしがみ
石神神社 市原市相川

創建年は不詳。祭神は倭建命。

伝承によると、ご神体と言われる石は、ヤマトタケル尊が東征の時、この地の鬼神に石を投げつけて殺した石と伝えられるものです。石は養老川に沈みましたが、江戸時代に漁師が網で引き揚げたので祀られたとされている。



たけし
武市神社 市原市武士

創建年は元慶8年(884年)・祭神は武御雷命(たけみかずきのみこと)
・大日姫命

元は建市大明神で本宮は大明神山の頂上にあっただが、明治初年に火災により社殿を焼失した。それを機に集落に近い遷座していた鹿島神社に御霊を移したという。旧鎮座地の境内には円墳があり、ヤマトタケル尊が東征の際に、里の良民が尊を警護し奉ったことに感謝し、この塚に到着して領民を見たいということから「人見塚」と呼ばれているが、古墳は6世紀初頭に構築されているという。



あわす
淡洲神社 市原市米沢

創建年は不詳。宝永年間に再建される。祭神は日本武尊。
境内に老婆神社が祀られ、祭神は伊邪那美命です。



あらかわ
荒沢神社 市原市真ヶ谷

創建年は不詳。祭神は日本武尊。
往古は岩窟に安置されていたが、文化13年(1816年)遷宮。
文久4年(1864年)に再建される。



はたきかすが
畑木春日神社 市原市畑木

創建年は景行天皇40年と思われる。祭神は国狭槌尊。
ヤマトタケル尊が東征の折に創建靈視されたという伝承がある。



おおみや
大宮神社 市原市五井

創建年は景行年間(西暦90年代) 祭神は国常立命・天照皇大神・大己貴命
伝承によると、大宮神社の社名は広大な境内に由来し、鎮座は景行天皇の御代、ヤマトタケル尊が東征された際に、弟橘媛の霊を慰めるためと、今後の旅の安全を祈願して創建されたという。



飯香岡八幡宮 市原市八幡

創建年は白鳳4年(西暦664年) 祭神は息長帯姫命・誉田別命・玉依姫。

相殿として日本武尊もある。

伝承によると、ヤマトタケル尊が東征の際、六所御影神社で休憩した時、村人が食事を捧げたところ、飯の香りを賞したと言い、「御影山」を「飯香岡」と呼ぶようになったという。



八坂神社 市原市椎津

創建年は崇神天皇の時代(西暦68年)という。祭神は建速須佐之男命。

伝承によると、初めは須賀山にあり須賀宮(または稲田の宮)と名付け、その後現在地に遷座した。

ヤマトタケル尊が東征の際、東夷鎮撫の祈願をしたと伝わる。



最強の敵「阿久留王(六手王)との戦い

「日本書紀」には、ヤマトタケル尊の東征は、「まつわぬる者たち」を征伐するという勝者の立場で書かれています。

その為、東征の敵となっている蝦夷は熊襲同様に野蛮の者たちであり、鬼のような悪賊たちとしています。

それは「日本書紀」の中で、武内宿禰(たけうちしゅくね)の報告を聞いた後に語った景行天皇の言葉にも表されています。

「日本書紀より」

天皇は日本武尊に斧と鉞(まさかり)を渡しながらいきました。「聞いたところでは、東国の者たちは性格が狂暴で悪いことばかりしている。村に長(おさ)も首(おびと)もおらず、領土を奪い合っている。山には邪神、野には姦鬼がいて、冬は洞穴で寝て、夏は森に住む。毛皮を着て、血を飲み、兄弟でも疑い合っている。飛ぶように山を登り、獣のように草原を走る。獣のよう、恩を忘れ、怨みをはらす。もとどり(頭の上で髪を束ねたもの)の中に矢を隠し、衣の中に刀を入れている。仲間を集めて、領地を犯し、収穫期に作物を略取する。弓を射ると草に隠れ、追いかければ山に逃げる。

昔から今まで朝廷に従ったことはない」

これにより滅ぼされて当然の悪鬼が生まれたという。

戦勝祈願

ヤマトタケル尊が戦勝祈願したと伝えられる神社がいくつかあります。

稲荷神社 千葉市中央区稲荷町

創建年は不詳。祭神は豊宇気比売命・久久能知命です。

稲荷神社は、ヤマトタケル尊が東国征伐の際に駒原神社(現稲荷神社)として豊宇受大神を祀ったとも言われる。

また、史書によると千葉常兼が大治元年(1126年)亥鼻に居館を構え、当社を千葉氏の守護神として崇敬、江戸時代には旗本深尾八太夫が当社を復興した。



くにかち

国勝神社 勝の宮 袖ヶ浦市岩井

創建年は景行40年(西暦110年)と言われる。

祭神は、事勝国勝長狭神・塩土老翁・猿川彦神・伊弉諾神・伊弉冉神。

ヤマトタケル尊が東征の折、山の端に神々しく上がる朝日を拝み、天の岩戸から出る天照大神もこのようだったのだろうとしてこの山を、「磐戸山」と付けたという。「岩井」の地名もそこから付いたとされたという。ここで戦勝祈願したと伝えられている。小高い所に建てており、現在は社殿周りは高い木に囲まれているため、眺めは良くありません。創建時には清住山や鹿野山が見えたようです。



さかと

坂戸神社・坂戸神社古墳 袖ヶ浦市坂戸市場

創建年は不詳ですが、養老2年(718年)に「磐戸神社」から「坂戸神社」に改称されていることから、少なくとも奈良時代には存在していたと思われる。一説では、太古の昔天富命が斎部氏一族を率いて阿波国(現徳島県)から安房国に移住し、その祖先神である天太玉命を祀ったのが起源であるという。



やくも

八雲神社 富津市岩坂

創建年は景行53年(西暦123年) 祭神は素箋鳴命・奇稲田姫命・大己貴命。

景行天皇40年(西暦110年)に、ヤマトタケル尊が東征の時、ここに神籬磐境を建てて素箋鳴命を祀った。景行53年(西暦123年)、景行天皇が東国巡行の時、ここに素箋鳴命の祭祀を行わせた社殿を造り、八雲大神の神号を与え、磐鹿六葛命(現宮司の祖先)に命じて祭祀を行わせ、天羽郡総鎮守と称したと言われている。その後、源氏、上杉氏、真里谷氏、里見氏などの崇敬を受けました。天文年間(1532年～1555年)に火災に遭い社殿を焼失し、元禄11年(1568年)に社殿が再興され、現在の社殿は安永4年(1775年)のものだそうです。



房総半島の昔話と地名

房総半島にはヤマトタケル尊が九頭龍と戦ったという昔話があります。

九頭龍とは阿久留王の事とも言われ、君津市・木更津市・富津市にはヤマトタケル尊との戦いを伝える地名がいくつか残っている。

昔、鹿野山の鬼泪山には九頭龍という大蛇が住んでいて、村人たちを襲い困らせていた。村人たちは都に九頭龍の退治を申し出ました。それに応えるかのように村にヤマトタケル尊がやってきました。ヤマトタケル尊は村人たちの前で草薙剣を見せ、九頭龍退治を誓いました。ヤマトタケル尊は村人の案内で鬼泪山に入り九頭龍を探しましたが見つからず、夜になりヤマトタケル尊は疲れて眠ってしまいました。そこに九頭龍が現われヤマトタケル尊は飲み込まれてしまいました。それから3日経ち、村を流れる川の水が赤く染まりました。赤い川を見た村人達は、ヤマトタケル尊が九頭龍を退治したに違いないとか、ヤマトタケル尊は九頭龍に殺されてしまったなどと騒いでいましたが、村人たちの前に姿を現しました。ヤマトタケル尊は九頭龍に飲み込まれると草薙剣で腹を切り裂き外に出て、九つの頭を切り落として、村に帰って来たのです。九頭龍の血で赤く染まった川を「血染川」「血草川」後に「染川」と呼ぶようになったという。九頭龍の霊は、後で祟りが無いように神野寺の境内に「九頭龍大権現」として祀られている。



鎗水川 袖ヶ浦市吉野田

鎗水川は、小櫃川の支流で、ヤマトタケル尊が賊を征伐したのち、槍を川で洗ったと伝えられており、このことから「鎗田川」となったという。

千草新田・千草海岸

「千草」は「血臭」「血草」から変わった地名と言われている。千草新田の海辺はかつて血臭浦と呼ばれていたそうで、戦いで流れた血で川が赤く染まったと言われる。



袖ヶ浦市におけるヤマトタケル尊に関わる地名と由来

・高谷 飯戸井(いいとい)

賊を征伐するために戦った兵や村人に保食神を出した地。

・高谷 鬼ヶ谷

賊が山に籠って抵抗した地

・高谷 上勘命・下勘命(かみかんめい・しもかんめい)

もとは「神迷」とも書いた。ヤマトタケル尊と戦っていた賊が鬼ヶ谷に籠り抵抗していたが、その時毒気を含んだ雲霧を吐き出したので、兵らは倒れてしまった。ヤマトタケル尊も気を失ってしまったが、桜大明神が現われて救いました。神が迷ったという意味で、「神迷」という地名が付き、後に「勘命」となった。

・滝ノロ 鬼塚(キヅカ)

賊の遺骸を埋めたところと伝わっている。

・滝ノロ 木別当

もとは鬼別当と書いていた。ヤマトタケル尊と戦って逃げてきた鬼らが、ここで死んだと言われる。

・滝ノロ 槍水

ヤマトタケル尊が東征に派遣されたのは、ここを治めていた景行天皇の皇子が阿久留王に攻められて滅んだことからそれを奪い返すことにあったと言われている。ヤマトタケル尊が賊を征伐した後、槍を川で洗ったことから槍水川という名になったという。

主戦場 鹿野山

ヤマトタケル尊と阿久留王との戦いの様子は、君津市や富津市などにある神社にも伝わっている。戦いの中心地になった鹿野山一帯では壮絶な戦いが行われました。鹿野山は標高380mの山で、白鳥峯や熊野峰、春日峰を合わせて鹿野山と呼んでいる。この山の名前は一説によると、賊を追っていたヤマトタケル尊が道に迷っていたところに鹿が現われて道案内をしたことから着いたという。



また、山頂付近には神野寺が建っています。この寺の名は、鹿野山での激しい戦いの中、山頂に諸神が現われてヤマトタケル尊の見方をしたことから付いたと言われ、西暦598年(推古天皇6年)に聖徳太子の開山によるもので、関東地方最古の寺で1400年の歴史がある。

^{しらとり}
白鳥神社 君津市鹿野山

創建年は不詳。祭神は日本武尊・弟橘媛命。

鹿野山の最高峰の白鳥峰に建つ神社で、白鳥大明神とも称される。鹿野山を拠点とした阿久留王が猛威を振るっていましたが、天皇の皇子ヤマトタケル尊が派遣され征伐されました。東国平定の後、伊勢能煩野で逝去しますが、白鳥となってこの地に飛来したという。村人たちはヤマトタケル尊の徳を偲んでここに白鳥神社を建てたという。

また、白鳥山山頂に日本武尊を祀る塚を築き、神社入口には弟橘媛を祀る弟橘比売神社が建っている。



^{おとちばなひめ}
弟橘比売神社

創建年は不詳。祭神は弟橘姫命。

白鳥神社の境内にあり、神社名額の代わりに大きな櫛が掲げられている。で入水した弟橘姫の櫛が海岸に流れ着いた事を伝えています。



^{きなだやま}
鬼泪山 君津市

ヤマトタケル尊は全軍をあげて阿久留王と戦いました。阿久留王もその戦いに望みましたが、時間が経つに連れて敗戦の色濃くなってきました。そんな時、ヤマトタケル尊の兵士が射た矢が阿久留王の眼に当たり、これ以上戦うことが出来なくなった阿久留王は涙を流して命乞いをしたという。その場所が鬼泪山と呼ばれている。

この山の地名は、もとは血泪山と言っていたが後に鬼泪山戸転訛したようです。

^{しらとり}
大福山 白鳥神社 市原市石塚

創建年不詳ですが、一説によると正治元年(1199年)に、源頼朝が勧請したという。祭神は日本武尊。

もとは蔵王権現社と呼ばれていたが、日本武神社となり、白鳥神社となったという。ヤマトタケル尊が鹿野山に賊を退治した折り、大福山に逃げた残党を追撃した古跡により祀るという言い伝えがある。

建久8年(1197年)に源頼朝霊夢により大福山に蔵王権現を祀ろうとしたが果たせずに命を落としたので、妻の政子が遺命を奉じて神鏡を奉納し、大福山に蔵王権現を勧請したという。



^{みたち}
御太刀神社 木更津市皿引

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

社伝によると、房総の鹿野山に土着の豪族阿久留王がいて小系川流域を支配していた。これを征伐するためにヤマトタケル尊が東国開拓の先人として派遣された。古備武彦や大伴武日連らと共に房総に上陸したヤマトタケル尊は鬼泪山で対戦することになった。阿久留王は勇敢でヤマトタケル尊軍は、苦戦を強いられたが、その時諸神が現われヤマトタケル尊を助けた。激戦の後、阿久留王は深手を負い、故郷の六手に敗走した。この神社にある「皿引」という地名はもとは「血引」で、阿久留王が血を流しながらこの地を通ったことによるという。東国が平定された後、ここに東国平定の勇者として社を建て、「御太刀神社」とした。



こだか
小高神社 袖ヶ浦市滝の目・いすみ市小高

創建年は不詳。祭神は日本武尊

元小鷹大明神と呼ばれていた。伝承では、ヤマトタケル尊がこの地の賊を征伐したことにより建てられたという。

房総の伝説

かめやま
亀山神社 君津市滝原

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

相模から海を渡って来たヤマトタケル尊は木更津から鹿野山を経てここに東夷の征伐に来ました。夷賊を平らげた後、人々を愛撫し村人はその威徳を仰いでヤマトタケル尊を村の鎮護の神として祀ることにした。



また「房総の伝説民話紀行」には、阿久留王の家来がこの山奥に逃亡して来た話が伝わっている。家来たちが逃げて来たこの地は山深く食べ物がありませんでしたが、谷間の池には多くの亀が居ました。兵たちは崖に穴を掘り住み家として暮らし亀を捕まえて食べていたので、やがて亀は食べつくされてしまい、拳句の果てに皆飢え死にした解いう。兵士たちは悪霊となり霧や雨となって山谷を暗くし、ここに人が住むことが出来ませんでした。その後不動明王が現われて悪霊を退治したので、山仕事をする人々が住み始めました。しかし、山深く穀物は育たず飢え死にする人もいたので、再び不動明王が現われ、炭焼き人が滝のそばに不動明王像を発見したこともあり堂を建てたという。

東北の悪路王

日本書紀や古事記には蝦夷についての具体的な記述はありませんが、ヤマトタケル尊が房総半島で阿久留王と戦ったという記述もない。しかし、木更津市、君津市、富津市などの多くに伝えられている伝承から、蝦夷との戦いは実際にあったと思われる。古事記の中の蝦夷との戦いは阿久留王との戦いと考えられ、実は東北地方に興味深い言い伝えがあり、史書「吾妻鏡」にも記載されていることから、「君津郡誌」では東北の出来事が誤って伝えられているものと思われる。「房総の伝説民話紀行」には、阿久留王が土着勢力を率いて駿河まで進出してヤマトタケル尊と戦ったが、敗れて地元に戻って再び戦ったと記されている。

上総から陸奥への経路（陸路説と海路説）

阿久留王を征伐した後のヤマトタケル尊の行程は2説あります。上総の西海岸から陸奥への出発地となる房総半島北東海岸へは房総半島内陸部を陸路で進むか、或いは海の西の海岸から出航し海路で外洋を廻って勝浦経由で北に進む方法と思われる。

陸路説

木更津から東に向かったヤマトタケル尊は、袖ヶ浦市三黒から茂原市長尾を経由して本納に向かった。その行程は各地の神社に伝わっており、市原市皆吉の弟橋神社と御嶽神社がやや外れていますが、それを除けば三黒から本納の橋樹神社に至る最短コースに沿っている。



吾妻神社（袖ヶ浦市）→御銚（殿）神社（袖ヶ浦市）→神代神社（市原市）→弟橋媛神社（市原市）→御嶽神社（市原市）→大宮神社（市原市）→武峯神社（長柄町）→天照大神社（茂原市）→橋神社（茂原市）→橋樹神社（本納）

^{みほこ}
御銚(殿)神社 袖ヶ浦市三黒

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

伝承では、ヤマトタケル尊が東征の折にここで銚を立てて休憩したという。



^{かじろ}
神代神社 市原市神代

創建年は景行天皇40年(110年)に創祀と言われる。

祭神は天照大日靈尊・保食神・面足神。

ヤマトタケル尊は弟橘媛の遺骸とともに近くを通過したと思われる。

その際洪水に遭い、先に進めなくなったので近くで休んだという。

そこが「いたも塚」と呼ばれている。また、神代には大小7つの塚があり、「神代七塚」と呼ばれ、その内の一つが「神のお休み場」と呼ばれており、その跡に弟橘媛の祭る社を建てたという。



^{おとちばなひめ}
弟橘媛神社 市原市皆吉

創建年は不詳。祭神は弟橘媛命

弟橘媛神社は橘禅寺の背後の山中にあります。橘禅寺は天平9年(737年)に僧の行基が薬師如来を祀った処です。そこはヤマトタケル尊が弟橘媛の遺品の櫛を埋めたところという。後に弟橘媛を祀る社を建てたという。

薬師堂の前にヤマトタケル尊がここで休憩したと伝えられる「腰掛松」があったという。



^{みたけ}
御嶽神社 市原市皆吉

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

橘禅寺城跡に建つ神社で、境内に大宮神社があったが、明治10年に合祀した。

橘禅寺境内にも御嶽神社があるが、こちらは分霊と思われる。



水飲坂 市原市川在

川在にある地名で「水飲坂」というところがあります。そこは、ヤマトタケル尊がこの地で清水を飲んだことによりついた地名といわれる。

^{たけみね}
武峯神社 長生郡長柄町

創建年は不詳。祭神は日本武尊・山座王。

昔ヤマトタケル尊が東海岸目指して横断途中にここに至りました。土地の首領の山座王らが歓迎し迎えられたのでここに進軍し、兵士らの労をねぎらったという。村の名の「六地藏」は道に祀られた六体の地藏があったことによるが元は「成武村」と称していたようで、ヤマトタケル尊がここに御成りなつたことで「成武村」となったといわれる。神社に蔵されている神輿は台座に「たたき環」のついている古い様式で、関東でも3指に入る珍しいものです。



天照大神社 茂原市真名

創建年は不詳。祭神は天照大神。

この地を通りかかったヤマトタケル尊は道端から湧き出す清水を飲みました。この泉は「天の真井」と呼ばれたことから地名になったという。のちに「真名」と変わりました。

橘神社 茂原市長尾

創建年は宝亀から天応年間らしいが、延長5年(927年)の延喜式にも見られる古社。祭神は弟橘媛ですが、日本武尊と建稲種命も祀られる。

社殿の床下に釜という赤土の塊が埋めてあるようで、その大きさは今の長さに換算すると約1.5m、幅62cmで、上面に3つの穴がある陶棺とも伝えられる。

また、それにはご神体となる弟橘媛の衣装が埋められていると伝承されている。



弟樹神社 茂原市本納

創建年は景行41年(111年)。祭神は弟橘比売命・日本武尊・忍山宿禰。

海路もしくは陸路でこの近くについたヤマトタケル尊は、弟橘媛の櫛を埋めてここに橘の木を2本植樹した。埋めた櫛は走水の海から海岸に流れ着いたもので、ここまで運んだと伝わっている。社殿裏の古墳がヤマトタケルが築いた弟橘媛の御陵です。境内には池があり「吾妻池」と呼ばれ、陵を築くために土を掘ったために出来たものと言われる。

かつて神社のすぐ東は海で、江戸時代には新田開発の時にヤマトタケル尊が乗ってきたと思われる船の帆柱が出土したという。(房総の伝説民話紀行より)



海路説

加知山神社(南房総市勝山)→莫越山神社(杳見)→熱田神社(御庄)→高蔵神社(鴨川市平塚)→瀧口神社(勝浦市)→瀧内神社(いすみ市大原)→小高神社(いすみ市小高)→船着神社(茂原市押日)→東神社(茂原市法目)→矛先神社(茂原市吉井上)→御霊神社(千葉市緑区小食土)→縣神社(大網白里町)→嶋戸神社(山武市嶋戸)→武社早尾神社(山武市早船)→浅間神社(山武市松尾町)→箱根神社(山武市松尾町)

加知山神社 南房総市勝山

創建年は不詳。祭神は素戔鳴尊・日本武尊?。

古くは牛頭天王という。元禄の大地震大津波で仁浜の天王塚が浪欠したので、1722年に2代醍醐新兵衛明廣が敷地の日月に天王の社地を開き、社祀を再建し遷座したという。現在社殿には浮島神社・八幡神社の3社のご神体が合祀されている。



莫越山神社 南房総市杳見

創建年は神武天皇元年(紀元前660年)。祭神は手置帆負命・彦狭知命。社伝によると、神武天皇元年の創立で天富命が安房開拓で当地に来た時に、随行してきた天小民命、御道命、祖神を祀ったのが始まりという。



西暦紀元前 660 年創立とあるが、弥生時代創世記に当たるのでそのまま鵜呑みにはできませんが、縄文時代の遺跡や古墳跡、条理跡などもあり、昔から開けた土地であったと思われる。

あつた
熱田神社 南房総市御庄

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

御庄(みしょう)地域の守り神で、この熱田神社は安房地方では千倉町大貫にあるのみで房州では珍しい神社です
名古屋の熱田神宮から勧請したものと思われる。



たかくら
高蔵神社 鴨川市平塚

創建年は神亀元年(724年)。祭神は日本武尊。

神亀元年に大山寺とともに良弁僧正が創建し、はじめは大山祇命を祀り大山神社と呼ばれた。その後、源頼朝の信仰厚く水田数町を寄せ、足利尊氏は祈雨満願によって水田を寄進、社殿及び400余段の石段を築造した。享和2年(1802年)3月に落雷により社殿を焼失、再建された。天保11年(1840年)に正一位に叙せられ 石尊大権現高蔵神社と敬称された。



勝浦市に伝わる昔話「日本武尊と大蛇」

勝浦市の部原地区には若い娘を大蛇が襲うのを日本武尊が助けたという昔話があります。この話は、出雲に伝わる素戔鳴尊と八岐大蛇の伝説によく似ている。日本武尊が部原に来た時、村人が集まって泣いているところに出会い、「どうして泣いているのか」と尋ねると「毎年秋になると山奥に住んでいる大蛇が村に降りてくるので、村一番の美しい娘を貢物として差し出さねばならず、それが今日の夕方だ」というのです。その大蛇は砂浜の長さ程あり、真っ赤な目と山ほどの大きさの頭を持ち、口から出る舌は炎のようでとても大きく恐ろしいと言い、もし差し出さなければ大蛇が大暴れをして村人は殺されてしまうという。日本武尊はこの大蛇を一目見てみることにしました。日が沈むと西の空は真っ赤に染まり、村人たちは一人の娘を残して泣きながら家に帰りました。突然大きな音がして山から赤い目を光らせて大蛇が現れ、頭を振って娘を探し始めました。そして娘を見つけ娘の顔を間近で見ようとしたとき、太刀を抜いた日本武尊が大蛇に切りかかりました。そして大蛇と日本武尊の激しい戦いが始まり、地鳴りが起こり海は嵐のように波たちました。日本武尊は体かわし、大蛇に乗って太刀を振り上げて大蛇の体や目を突き刺しました。大蛇の体からは血が吹き出し、山海は真っ赤に染まりました。日本武尊の猛攻撃に遭った大蛇は海に崩れ落ち死にました。こうして大蛇を退治することができました。これを見ていた村人たちは、抱き合って喜び、日本武尊たちを厚くもてなしました。この言い伝えからこの地を「蛇原(へびはら)」というようになり、それが転化して「部原(へばら)」となった。



たきぐち
瀧口神社 勝浦市部原

創建年は延暦元年(782年) 祭神は日本武尊。

上記の「部原の大蛇伝説」にちなむ神社。



瀧口神社 勝浦市宿戸

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

房総半島東海岸の伝承地

勝浦市新戸 ー日本武尊がこの地で休憩したという。神が休止したという
意味から「新戸(しんど)」となった。

新官 ー日本武尊の東征の時に館を建てたことによりこの地名がついた。



おおいたきうち 大井瀧内神社 いすみ市大原

創建年は貞観年間(859年~877年) 祭神 日本武尊

大井瀧内神社は、貞観年間に創建されたと言われ、大井地区の鎮守として祀られている。例大祭終了後には造式日月神社の神輿とともに貝須賀神社の神輿を護衛する「三社の別れ」行事が行われている。(市指定文化財)



こだか 小高神社 いすみ市小高

創建年は不詳。祭神は日本武尊。由緒等は不明。

ふねづけ 船付神社 茂原市押日

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

石碑によれば、ヤマトタケル尊が船でこの地に着いた時(昔は神社南方が入江だった)、まさに夕日が沈もうとしておりヤマトタケル尊は「惜しい日」だと言い、これが地名となり「惜日→押日」に変化したという。



あずま 東神社 茂原市法目

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

ヤマトタケル尊が東征の際、乗っていた船が難破したため、船の帆柱を埋めた所で「帆埋(ほうめ)」と呼んでいたが、「法目」と書くようになったという。



ほこさき 鉾先神社 茂原市吉井上

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

みれい 御霊神社 千葉市緑区小食土

創建年は不詳。祭神は日本武尊。

伝承では、ヤマトタケル尊が東征の途中で休息したところで、村人が食事を献上した。地名の小食土町の由来となっている。



^{あがた}
縣神社 大網白里市土気町飛び地

創建年は不詳。祭神は大日靈尊・橘比売命・誉田別命。

当社は創建年は不詳ですが、第13代成務天皇の代に、当時の地方官庁である縣主が奉仕した神社です。

その後、長享2年（1488年）に酒井定隆が土気城を再建した際、鬼除けとして北東方向の当地に建てられた。以後は酒井氏の守護神として崇め祀られた。文化13年に野火のために焼失したが、天保14年に再建された。



^{しまと}
嶋戸神社 山武市嶋戸

創建年は不詳。祭神は日本武尊・菅原道真。

ヤマトタケル尊が東征の折、館の戸を開けて見たことから「嶋戸」という地名が生まれたという。



^{ぶしやはやお}
武社早尾神社 山武市早船

創建年は不詳。祭神は日本武尊・彦押人命。

ヤマトタケル尊が東征の折、早い海流を逃れこの地に上陸したと言われる。

祭神の彦押人命は武社国造て尾張氏の一族。ヤマトタケル尊の東征に従って来てこの地に住み着いたという。



^{たまさき}
玉崎神社 旭市飯岡

創建年は景行天皇40年。祭神は玉依姫尊。

社殿によると、景行天皇40年の創建されたという。ヤマトタケル尊が東征の折、相模から上総にわたる際に暴風にあい、弟橘姫が「これは海神の御心に違いない」と言って入水したので、無事に上総国に上陸して葦浦を廻り玉之浦にわたることが出来た。そこでヤマトタケル尊は、その靈異を恐れて海上平安、夷賊鎮定のために、玉之浦の左端「玉ヶ崎」に海神の娘であり神武天皇の母である玉依姫尊を祀ったと言われる。

この冊子作製に当たり、以下の資料を参考に編集した。

- ・ウイキペディア 「ヤマトタケル」
- ・日本武尊伝説 日本武尊の足跡を追いかける
- ・千葉県寺社案内
- ・ヤマトタケルの東征
- ・いちはらの地名の由来と史跡と文化財

制作・編集 上総の国いちはらの歴史を知る会

090-3545-1113